

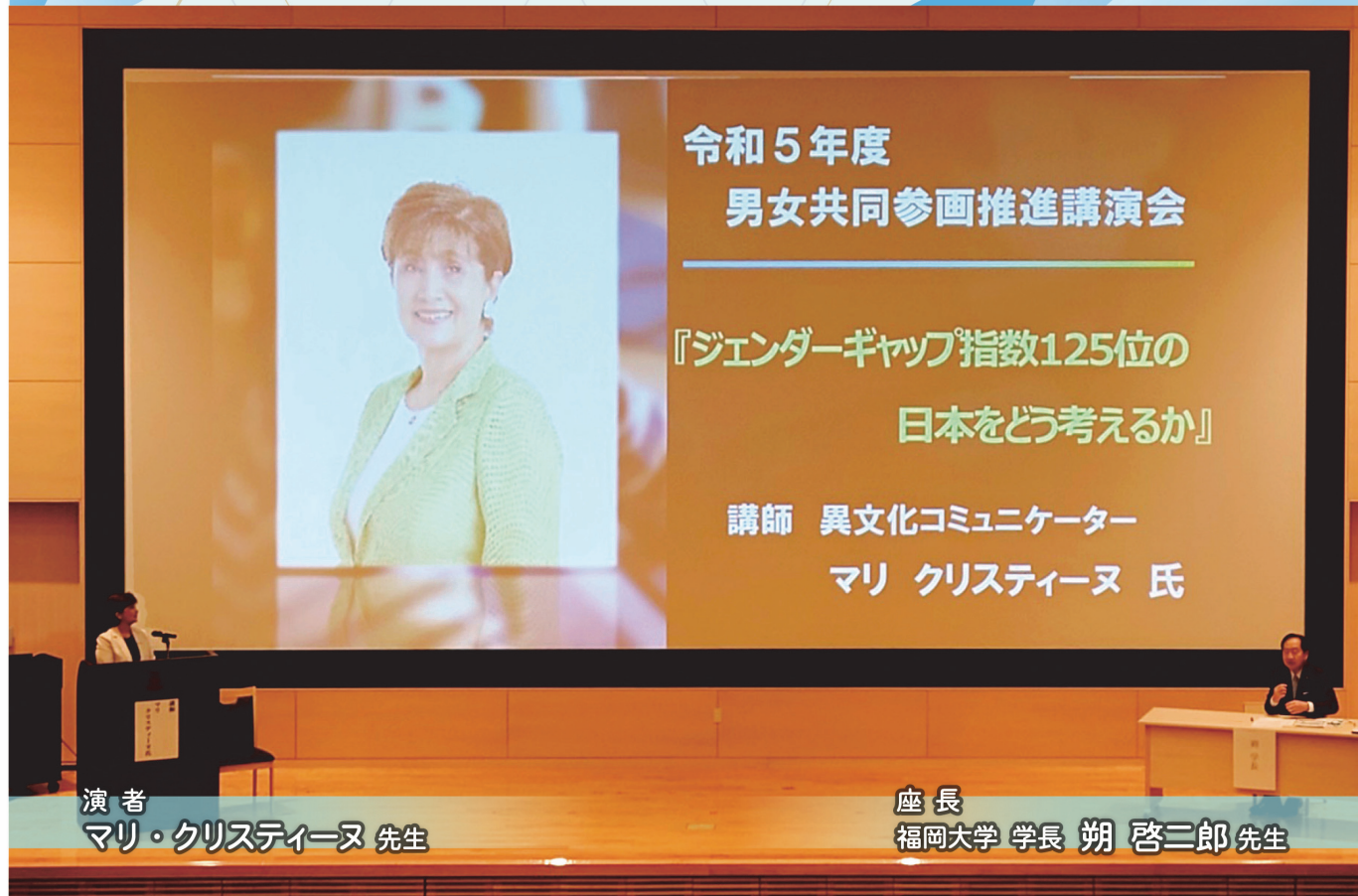
NPO法人 臨床応用科学
Clinical and Applied Science

Vascular Street Journal

令和5年度男女共同参画推進講演会

ジェンダーギャップ指数世界125位の日本をどう考えるか

(講演の極一部を、VSJにまとめました) [2023年10月17日開催]

演者
マリ・クリスティーヌ 先生座長
福岡大学 学長 朔 啓二郎 先生

朔学長挨拶：

学長の朔でございます。本日はお忙しい中、男女共同参画講演会に参加いただきありがとうございます。学校法人福岡大学はすべての教職員が生き生きと活躍できる多様性のある豊かな大学作り、これを推進できるように、ワークライフバランスの実現の為に環境整備に取り組んでいます。この度、男女共同参画を推進して多方面で活躍されているマリ・クリスティーヌ先生をお呼びいたしました。私は、マリ先生と様々な財団の協議会や会議で一緒になって、1年ぐらい前から、「是非、福岡大学で講演して下さい」とお願いしていて、やっと実現しました。マリ先生は、東京女子大の教授など、マルチなご活躍をされてます。マリ先生、よろしくお願いします。

講師 マリ・クリスティーヌ先生：

ご紹介ありがとうございます。本当に長く朔先生と色々な会議で一緒させていただいてます。私は国連のハビタット親善大使を2000年から2015年までやらせていただきました。福岡のアクロスの中に国連ハビタットのアジア太平洋地域本部がありますので、そこで様々な活動、講演等をさせていただいたり、頻回に福岡に来ていた時期があります。

異文化コミュニケーションはヒトとして大切

福岡は大好きな街で、食べ物も美味しいですし、今回、朔先生にお声掛けいただいて大変嬉しく思います。私は異文化コミュニケーターという肩書きで仕事をしています。異文化理解は幅が広い、例えば、世代間や地域間の異文化理解、企業間の異文化理解もあります。私たちみんな持っている仕事の異文化理解もあります。みなご自分の独自の文化を持ってその中で動いているので、たまに文化の衝突があるのです。どのようにしてお互いを理解し、ぶつかるところをどのように緩和していくのか。または、理解されていないところをどのように表現すれば相手に理解していただけるのか。バイアスを持つ気持ちとか、またバイアスを持って人を見ることをしないようにどうすれば良いか。私の叔母が九州の方と結婚していました。私は叔母の家の小さい部屋を使わせてもらい、そこから上智大学に通っていました。叔母が洗濯をすると、いつも叔父の下着や洋服は全部1番上の段に干していました。私が早く乾燥してもらいたい服があるからと、私が上にかけてと怒られるのです。私の洋服は明日着なければいけない。今日乾燥させたいと言って干すと「駄目、駄目。叔父様が上」。「どうして？」という「男の人だから」と言われて、男の人だから何故上にかけていけないのかがわからなくて、その話を友達にしたら「うちはそんなことしてないよ」と言われました。叔母に「私の何々さんというお友達のお家は、別に男の人の下着上にかけてないし、自分の下着ちゃんと干せるようになってるのよ。どうして？」って言ったら「うちの叔父様は九州男児だから駄目だよ」と言われました。でも、思い浮かべますと、うちの父も母もそうでした。父は米国軍人でした。冷戦抗争の時にドイツ・アメリカ・イラン・タイに行ったのですが、夕食になりますと父が出張であっても、必ずテーブルセッティングをしていました。父が座る場所にセットされていて、またそれが当たり前だと思って、父が居ても居なくても父の席には誰も座らなかったですね。たまたま私が泊りできるようになって、アメリカ人の友達のとこに泊まりに行ったら、彼女のお家は6人家族で、夕食の時に「あなた、今日ここに座っていいから」と言われて、「でも、お父さんの席でしょう。座っちゃいけないでしょう。私、あなたの横に座るわ」というと「いや、いいの、いいの。そこに座りなさい」と言われて、そこに座って食べました。うちに帰って母に「ママね、あそこのお家はね、お父さんの席はね、ちゃんと空けておかなくて、私がそこに座ったのよ」って言ったら、母は「あっ、そうなの？」って、「アメリカ人のお家だから」と言われて「だって、うちはアメリカ人の家でしょう？」って言ったら、「いや、うちはアメリカ人の家だけど、でも、日本では昔からお父さんが居なくてもその席はお父さんの席だから座らない」。あとになって、陰膳もあるという事を聞いたのですが、そういうミックスな文化の中で私はずっと育ってきたわけです。上智大学比較文化学科を卒業したので、その時は「比較文化研究者」とか「比較文化」というものを学問として仕事をしていたということが昔の自分でしたが、今は、「異文化理解をする」ということの中で「異文化コミュニケーター」という肩書きを自分で考えて使っています。

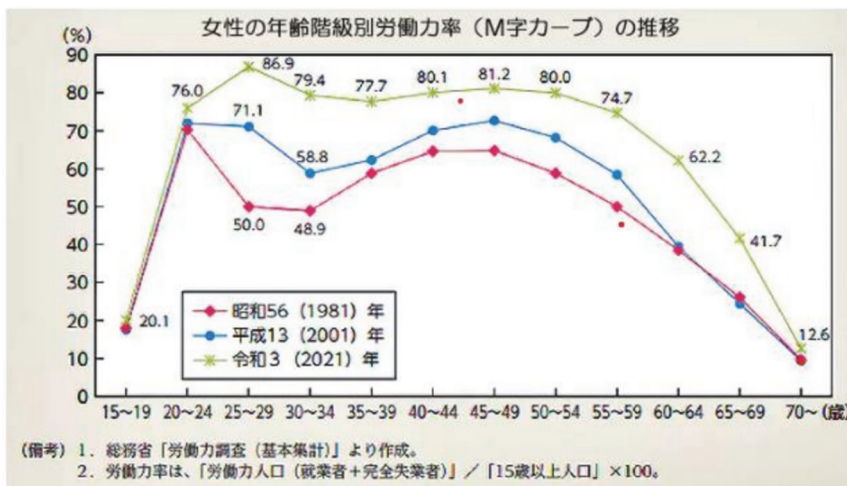
今日は、「ジェンダーギャップ指数 125 位の日本はどう考えるか」というタイトルですが、非常に大きな課題です。「ジェンダーとは何でしょう」という事が最初の課題だと思います。生物学的な性別ではなくて、社会的、そして文化的に構築された性差のことです。叔父の下着を上にかけるべきいけないというのは、家族にとってはお金をちゃんと持って帰ってくる方で、その方に食べさせていただいて、その方に対する尊敬の念を持って敬う、尊敬することの大切さも長年の文化の背景の中にあるわけです。つまり、男は働き手で家族を養うべきであるということが当たり前になっている時代が長かったということだと思います。女性にリーダーは無理と思われる方々もいます。男子は理系、女子は文系、なかなか女性は理系に行かないというのが凄く残念ですが、もしかすると小さい時からそう言われているからそうなのかなということも無きにしも非ずです。女性はお淑やかであることが1番とずっと言われてきました。小さいときから父は「あなたは何をしたいかでも何でもできる」とずっと言われて育ってきたのです。最初のアメリカの女性大統領になろうと思えばなれるよと、小さい時から言われました。母には、「あなた、勉強しすぎて頭でっかちになると、お嫁さんに行けなくなるわよ」って言われました。だからその家の中でも2つの価値観を持っている育て方がある両親の間にいたわけですが、日本に帰ってきて私が何かちょっと口答えすると、叔母に言われたのは「女の子は可愛くなきゃダメなのよ。そんな口を聞いちゃダメよ」って言われて、「なんで女の子は可愛くなければいけないのかな、正しければいいじゃない」と思ってたのです。

ジェンダーギャップランキング 125 位

各国における男女格差を数値化したもので、世界経済フォーラムが2006年から毎年公表しているレポートです。グローバルジェンダーギャップレポート、世界男女格差レポートにて公表されている世界各国の男女間の不均衡

を示す指標です。11 月になるといつも皆で待ち構えて「今年の日本は何位になったのか」と、気になるのです。スコアはランキングの形で示されます。経済、教育、保健、政治の各分野のデータに基づく総合値を算出しています。ジェンダーギャップランキングの中で、これはどういう分野で、例えば、経済ですと給与及び所得の男女平等。自分と自分が一緒に働いている男性、または女性が同じような給料をちゃんともらっているのか？給与及び所得が男女平等であるのか？あとは管理職、技術職、専門職が男女平等になっているか？ちゃんと自分も一緒にになって偉くなっているのかどうか？女性だから偉くなってないのか、または男性だから上げてもらえてないのか？2021 年、2022 年、2023 年を見ますと、日本はだんだん経済的には上がってきてます。それで教育を見ると識字率も日本はトップです。識字率、初等教育率、および高等、専門教育への修学。識字率も日本は 1 番でありながら、今度、初等教育や高等、専門教育への修学になるとちょっと落ちてくるわけです。2022 年には 1 位でしたが、その前後の 21 年、23 年は 92 位、そして 47 位。健康に関しては、出生児の男女割合と健康寿命が 69、63、59、23 年はとても良くなってきて、あとは政治に関してはちょっと困ってしまいます。これは国会議員、閣僚、国家元首の女性比率は、結局、2021 年はとても低く 147 位でしたが、22 年は 139 位。総合的に見ますと、156 カ国中、それは 2021 年でしたけども 120 位でした。2022 年になりますと 146 カ国では 116 位で、今年は 146 カ国で 125 位になったわけです。皆さんこの数字を聞いた事がありますか。「202030」そして、「203030」。2020 年までに指導的地位にいる女性が占める割合を少なくとも 30%にするという政府の目標の事です。2003 年に男女共同参画推進本部が定められて、2005 年には閣議決定されて、そして第 2 次男女共同参画基本計画に掲載されたわけです。しかし、この計画の実現はほとんど殆ど不可能ということが判明したわけです。203030 になったのは、2020 年 12 月の第 5 次男女共同参画基本計画の策定過程では、2030 年代には、ということではもしかすると 2039 年の間かもしれないですけど、2030 年代には誰もが性別を意識することなく活躍でき、指導的立場にある人の性別に偏りが無いような社会を目指すと変更されたわけです。

＜図 1＞



M字の谷が浅くなっている（令和4年版男女共同参画白書より）

これも皆さんよく目にしていられっしやるかと思いますが＜図 1＞。M 字曲線の中で見ると 1981 年は M の谷が深いのですが、少しずつ改善して 2021 年はかなり浅くなっています。昭和、平成、令和の時代を見ていただければわかると思います。ですので、だんだん今の時代、女性達はもっと頑張れるようになってきているわけです。主要国における女性労働者の年齢別グラフをみますと、先ほども申し上げたようにスウェーデンは 1 番凹みがないわけです。とにかくワンラインになっていて、ずっと盛り上がって、そして定年の時期になるとだんだん仕事が少なくなってくる。

日本国内の非正規雇用者の割合ですが、

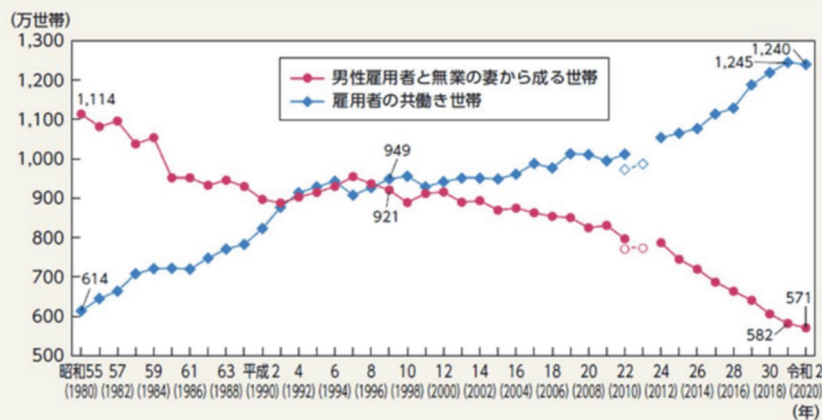
就職時は男女の差がありませんが、30 歳以上になると女性の非正規雇用者の割合が高くなるわけです。これはしょうがないです。しょうがないというのは、男性はずっと安定した仕事をもらって、そして女性は働ける時に働いて、働けないときには働かない。その働けないというのは、自分の周りの環境がそれを許せないところがあるわけです。

共働き世帯数の推移ですけども、これは 1996 年から共働き世帯が増えて、男性雇用者と無職の妻からなる世帯を上回っていることが分かりますが、これは男性が働いて女性が無職の世帯は赤いグラフでみえています＜図 2＞。段々低くなってきている。令和 2 年になりますと、もうこれは共働きしないと食べていけないという状況に日本の社会がなっている。私は単なる食べていけないからではなくて、女性たちが自分たちの自己実現がすごく大事であるという事。そして、自分自身の人生も大切に、それを周りもちゃんと認めてくれているからこそこそこうやって共働きにもなっているわけですし、単なる食べていくために 2 人で働かなければいけないという世帯が多いということはあるけれど、それだけではないのです。育児休業取得率の推移ですが、2018 年の調査で、女性は 80% くらいの人たちが育児休業を取っていますが、男性は 6% ぐらいしか取っていません。皆様方、こちらの職場ではどうでしょうか？私も子供をアメリカで産みましたが、私をずっと診てくださった産婦人科の先生がいて、おじい様だったのですが、その先生が、たまたま私が産気づいて病院に運ばれた時に、すごく若いカッコいいハンサムな先生が出てきました。「僕がちゃんとお産してあげます」。



<図2>

I-3-3 図 共働き等世帯数の推移



- (備考) 1. 昭和55年から平成13年までは総務庁「労働力調査特別調査」(各年2月。ただし、昭和55年から57年は各年3月)、平成14年以降は総務省「労働力調査(詳細集計)」より作成。「労働力調査特別調査」と「労働力調査(詳細集計)」とは、調査方法、調査月等が相違することから、時系列比較には注意を要する。
2. 「男性雇用者と無業の妻から成る世帯」とは、平成29年までは、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者(非労働力人口及び完全失業者)の世帯。平成30年以降は、就業状態の分類区分の変更に伴い、夫が非農林業雇用者で、妻が非就業者(非労働力人口及び失業者)の世帯。
3. 「雇用者の共働き世帯」とは、夫婦共に非農林業雇用者(非正規の職員・従業員を含む)の世帯。
4. 平成22年及び23年の値(白抜き表示)は、岩手県、宮城県及び福島県を除く全国の結果。

「わたしの先生、どこに行っちゃったの?」、「いや、奥様と結婚記念日でバカンスに行ったので」「えー、先生にお伝えしていたのに」と思ったんですけど。そうやってチームを組みながらやっていらっしゃるから、自分たちもある意味では自己実現といいますか、自分の人生もちゃんと謳歌出来るような制度になっているので、日本も何か日本風の工夫をしていただき、先生方がリフレッシュできるような状況が作れたらいいと思うのです。

母親になることはペナルティではない

性別役割分業。男は仕事、女は家事、育児という性別役割分業意識は、高度成長を背景に 1950 年代以降に強まった考え方です。その基礎となっているのは、妊娠、出産、授乳という女性の生理機能にあると言われています。私が日本に最初に来た時に、夫婦のコマーシャルがたくさんあって、その中で「君作る人、僕食べる人」それがすごく差別的であるということになって、結局放映がストップされてしまいました。今考えると当たり前におかしいのですが、でも、その頃は誰も疑問を持たずに「君作る人、僕食べる人」というのが可愛くて暖かい家庭という感じでした。私たちの知らないうちにいろいろな形で私たちが洗脳されていることがあるわけです。この性別役割分業の課題の中には、家族の生活維持のために不可欠な労働であって、そのただである家事労働に依存して労働力を再生しているということが当たり前のこととして繰り返されてきたことが不合理であって、不平等であるということです。性別役割分業に、他の誰よりも持続して、深く関わる母親の意識や行動を評価する必要があるのです。大学でこのジェンダーの授業を学生さんすると、「あなたの周りで unpaid-worker は何人いますか?」とか聞くと、キョトンとして、「unpaid-work している人は周りに居ないの?」という、「ん?」って感じで。「朝、誰があなたの朝食を作るの?」って聞くと「母親」。「あなたの洋服、誰が洗濯するの?」「母親」。「それは仕事じゃないの?」って言う。「あ、仕事です」。「で、あなたいくら払っているの、お母様に、やってもらったために?」それもきょとんという感じです。ですから、unpaid-work が私たちの周りにたくさんあるということの認識をまずもっていただきたいのです。親は子供の成長のために性別役割分業を受け入れて、当たり前として暮らしてきてます。愛情の表現だったと言われてしまうと、「ちょっと待って」って言いたくなるわけです。そして、そこで母であることのペナルティーがあるのです。これは働いている女性にとっては有給の育児休暇制度が無かったり、待遇面で差別を受けたりと、母親になることにペナルティーがあるという状況が少なくありません。出産、育児などの休暇を理由に、昇進などにおいて女性が差別されることもあります。世界中のどの国においても子供がいる女性は、子供がいない女性よりも収入が低い傾向があるわけです。母であることのペナルティーは、先進国よりも途上国の方が顕著に見られるわけですが、世界的に女性は男性よりも 2.5 倍の無償労働や家事労働を行っているわけです。世界の 80 カ国では、父親への育児休暇制度がありますが、ほんの 1 日から 2 日の無給休だけとるという男性が多いのが現状です。

ヨーロッパに行きますと、先ほどから話していますように、スウェーデン、デンマーク、そういう福祉の歴史が長い地域ですと、家族の面倒は看ないで下さいと政府が言います。それはなぜかということ、家族が家族の面倒を看なければならなくなると、そこで家庭が崩壊するわけです。なぜ崩壊するかということ、元々愛情を持っている相手に対して、自分に対しての要求が多かったり、喧嘩したりすると、そこで今まで仲良かった家庭がお互い自立していたときに、それが崩壊して社会の秩序が乱れるのです。ですから、あなたは働きに出てください。



あなたは働いて税金を納め、私たちはあなたの家族を看ますということで他人に来てもらって生き生きと仕事して帰ってくると、病気を家で面倒を看られている方に対して暖かい気持ちと、新しい社会の情報を家族に持ち込んでくれる。お父さんが昔、家に帰ってくるとみんな喜んでいてのは、お父さんがいつも新しい情報を持ってくるじゃないですか。食事で今日はこんなことがあったよとか。それこそサザエさんの漫画じゃないですけど、家族の中での会話があるのです。

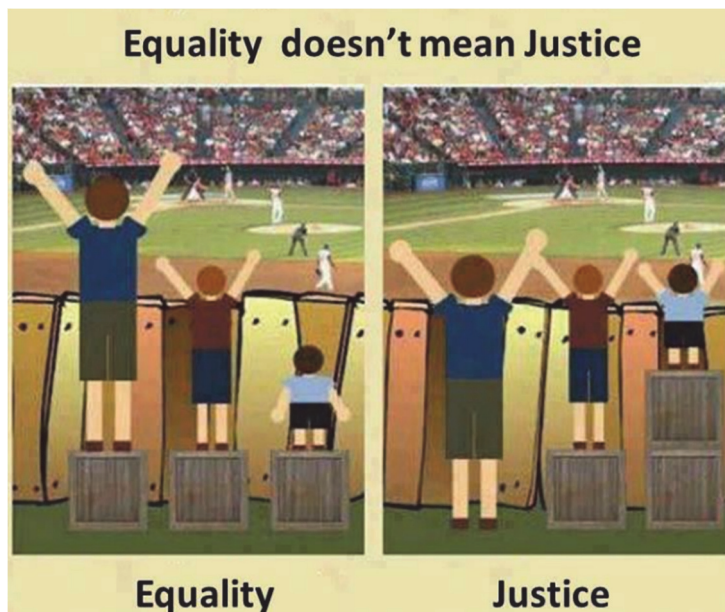
待機児童の話をして。待機児童とは保育所への入所申請がなされています。入所条件を満たしているにも関わらず、保育所に入所できない状態にある児童のことです。政府は2020年末までに待機児童ゼロにする目標を立てましたが、2020年4月1日の時点で1万2,439人の待機児童があつて、目標は達成できなかった。2023年4月1日時点では、2,680人に減ったと言われているんですけども、コロナの影響で利用を控える動きや、子供の数そのものが減少している状況で、待機児童が少なくなっています。待機児童問題が解決しない原因は、さっきからお話していますように、共働き庭の増加や都市部の人口集中、そして、核家族の増加、保育士不足。そういう点では連鎖反応でいろいろな状況を生み出しています。今回、びっくりしたのは、そういうことの中でいろいろと子供に対する犯罪を防止するために、埼玉県のどこかの町が子供と一緒に学校に行かなくては行けませんという、それはすごく良いことだと私は思います。ただ、日本の社会にそれを支える背景はありません。日本は夜中子供が道を歩いていても変なことされない、危なくない。神話ではないと思いますけども、そういう噂が流れています。ですから、子供達も電車で学校に1人で行っている、親がついていかなくても良い。アメリカの場合は、ヨーロッパもそうですが、小さい時から子供を学校に連れて先生に手渡して、そして先生からまた受けて連れて帰る。私の娘が小学校4年生と1年生の子2人とアメリカにいます。娘の仕事は朝から晩まで子供の送り迎えです。学校に行きますとすごい列です。子供たちを学校に連れて行くための列が警察まで出てきて、どこの学校もそうです。フロリダですけども、そうすると交通整理をするように警察官が出てきて、自分のクラスの先生が道路で待っています。自分の生徒を自分の側に寄せて「こっちにいらっしやい」。2、3人集まるとアシスタントがその子供たちと手を繋いで部屋に連れて行きます。また出てきてそこにまた2、3人の子供がいる。こんなことをやっていて大変だと思いましたが、彼らの文化の中での子供を安全に扱うための1つのシステムなのです。日本の場合、今までそういうことをやっていないので、いきなり埼玉でそういう話が出て、みんなびっくりしたのだと思います。ですから、もう少し何かジャパニーズスタイルといえますか、日本の文化に合った形でしなければならないでしょう。

無意識の偏見、unconscious bias とは

自分が気づいていないのに持っている偏った考え方のことです。私が関東で育っているのですが、お正月になると私が食べるお雑煮は鳥ガラで作る雑煮でお醤油味です。そこには里芋や大根とか人参とか菜っ葉、焼いたお餅が入っています。京都に行きますと、京都は白味噌のお雑煮で丸餅を焼かない。私は、愛知万博の広報プロデューサーを2005年の万博でやったときに、その年の大晦日にみんなにお雑煮ができました。その時に私はNHKの「ゆく年くる年」の最後に、私が広報ですから最後にその食堂に行って、お雑煮ですと出されたときに、そこには透き通ったお汁の中に焼いていないお餅と、その上に菜っ葉がかかっていた。それで、遅く来たから鶏肉も大根も全部何もなく、残ったのがお餅と菜っ葉だけなのねと、隣にいた人に言ったら「そうじゃないよ。これは愛知のお雑煮はこういうものだ」、「何も入れない」と言われました。自分にとって当たり前のことは周りのみんなは当たり前でないということへの認識を持つということがすごく大事なことです。女性は優しくて世話好きであるとか、女性は生まれながらにして母性本能を持っている。母性本能持っていない女性、たくさんいます。最近の若者には根性がないというものの、すごい根性のある、海外青年協力隊に行かれている若者をたくさん知っています。このunconscious biasを自分で意識していないだけに、自分で自分に自覚するという事を努力しなければいけない事でもあるのです。自分でどんどん進化していきながら、自分が持っていた様々な先入観や、自分が持っていた価値観の中で「これが絶対正しい」と思っていたことが必ずしもそうではない。人間の持っている正義感や、または何が事実であるとか。特にウクライナとロシアの場合は、宗教というイデオロギーではなく、一方、パレスチナの場合は宗教というイデオロギーです。ですから、でも宗教の形を作っても人間です。私はドイツ・アメリカ・イラン・タイで育ってキリスト教、そして、イスラム教徒、ヒンズー教徒、日本に戻ってきて仏教、神道、そして、私はカトリックとして育っているわけですから、みんな神様が居るのです。誰も他の人のものを否定することはできないと思います。辿り着こうとするところを1つであつて、それは神が自分をちゃんと守ってくださって、そして自分は幸せになれる1つの道であると思えば、他の人が行く道を否定するという事は、私はできないと思います。

LGBTQ は生まれつきの性別だけではなくて、体と心の性が違う人のことを言うわけです。近年、性のあり方は、一般的に男性、女性といえど二通りの存在以上に存在していて、多様であるという考え方がだんだん広まっていますけれども、体の性と心の性の違う人は、左利きと同じくらいの割合で存在しているという事を知っていましたか？私、この前初めて聞いて驚きました。LGBTQ への正しい理解や権利の保障は大変重要で、LGBTQ 理解増進法が今年の 6 月に成立したわけです。本来なら 2021 年東京オリンピックまでに、その前に成立を目指していたのですが、反対意見があまりにも多くて、成立に時間がかかったのですが、LGBTQ の方々の人権が阻害されないという事は当たり前のことです。

<図 3>



そして、誰 1 人取り残さないという大きなテーマを実現するためには、すべての人が生きにくさを感じる事がない状況を作り上げていくことです。その中に LGBTQ も入っていると私は解釈しています。それで、平等と公平。よくみんな「平等よ」とか「公平よ」と言いますが、その平等である事は平等に同じ形の箱をみんなに与えることが平等であるということの認識を変えて行かなきゃダメだと思います<図 3>。そうではなくて、公平であるという事はその人 1 人ひとりに合った形でみんなと対等になれる状況を作って差し上げることが公平です。色々な形で社会に参加していると、みんなに平等にしないといけないという変な先入観があるわけです。それをちゃんとしたルールにしていけばみんなが安心する。なぜかという、ルールその通りにやっていけば自分は何も考えなくてすむし、責任を取らなくてもいいし、説明しなくてもいいわけです。ですが、そういう社会ではないということの認識を持てないといけないのではないかと思います。是非、今

日の話が少しでも皆様の役に立てたら、是非、活用していただけたらと思います。また、大学の中にも外国人の留学生の方や、外国から来られている方も沢山いらっしゃって、やっぱり彼らは少数派ですので、彼らが少数派であることを感じないようにウエルカムな気持ちで受け入れて、一緒にお仕事していけたらいいのではないかと思います。

マリ先生に質問

朔学長： マリ先生、とてもわかりやすいお話、ありがとうございました。福岡大学は 90 年ですけど、僕が知っている限り、女性の学長とか、副学長とか、女性の学部長は出てませんね。それには、色々な環境が必要で、女性の自己実現も必要です。テレビの宣伝に洗脳されているのかもしれませんが、unpaid-work とか、unconscious bias を非常によく説明をしていただいた。



小野寺副学長： 文化の違いや年齢世代による文化の違い、利益の衝突のお話もありました。その文化の違いがある人をどう付き合えばいいのかというのがいつも悩んでいるところでお教えいただければと思います。

マリ先生： やはり説明しかないとしか答えられないですね。例えば、先日、外国人留学生川柳大会があり、その審査員をさせていただいたときに、すごく感動したのは、「漢字教えないで、空気の読み方教えてよ」という外国人留学生の川柳でした。ですから、空気の読み方は文化だなと。小さい時から自分たちの空気のように私たちが身に付けている様々な価値観であったり、理解であったりするのが文化であって、それを言葉にして説明するということがとても大事で、私も日本語で「阿吽の呼吸」

をどうやって英語に訳すかとか。「つうと云えば、かあ」とか、そういうものは日本人同士何も言わなくても人の気持ちを察することができる日本人。でも、本当に察しても自分の勝手な思い込みで察していることが多いわけです。「きっと、この人こう考えているだろう」と思って、相手は何も考えてないのに、だけどこっちが意味を理解している、みたいな。ですから、そういうことが私のやっている異文化理解の基本であって、だからその空気の読み方からやっぱり文化の理解とか、文化の表現の仕方とか、そういう事というものはある意味ではすごく重要ではないかと。だから私は「日本人は何だ」という事を私は小さい時から、もっと言葉にして子供に教えていかないと、日本人の素晴らしさってどんどん消えていくのではないかと思います。

小野寺副学長: 立ち入った話になるかも知れませんが、2つの文化の中でいろいろ苦労されていますよね。東京文化と九州文化とか。それで、男が偉くて当たり前という九州文化。そういう時はどのように自分で対応されたのですか？自分の中ではうまく解決できた、やっぱり悶々としていたというか、いかがですか？

マリ先生: 例えば、タイで、私ずっと学校を作って、この30年近く学校建てています。建て始めた1番の理由というのは、子供達が教育を受けることによって読み書き算数ができるようになれば、自分が屋台で働いて親を食べさせることができるから、親が子供を売らなくて済むようにと思って、そのころ人身売買が1996年頃ですから激しかったわけです。その頃行った村で、女の子たちに「あなた、大きくなったら何になりたいの？」と言ったら「花屋さんになりたい」とか。「学校の先生になりたい」とか。「屋台でお菓子作って売りたい」とかとても可愛い夢でしたが、何人かの子供たちが、その村に住んでいるあのお姉ちゃんみたいになりたいって言うわけです。そのお姉ちゃんの名前は知っていたけどなぜそんなに偉いのか分からなくて、寺子屋のお坊さんに聞いたら、「あの子は親孝行娘だ」と。村では評判の親孝行娘。でも、現実には、彼女は小さな掘っ建て小屋で、誰も近づかないところに一人でいました。彼女はHIV感染してHIVで死ぬために村に戻ってきているわけです。親御さんもその娘さんとは接触しないで、食べ物を持ってきて入口に置いて逃げちゃうわけです。あんな悲しい生活している女の子になりたいのがすごく不思議で、お坊さんと通訳のいろいろな方がいたので詳しくお聞きしたら、タイの仏教は小乗仏教と言って原始仏教です。だから男の人じゃないと悟れないわけです。出家することができない。だから、女の子は「自分が女の子として生まれたのは、前世で悪いことをしたからだ。今世では自分が徳をたくさん積んで、一生懸命お坊さんに托鉢したり、どんな苦労をしても、たとえ身を売するようなことをしてでも、たくさん親孝行すれば、来世、男として生まれ変わるから、そうすると、次は自分が良い人生を送れる」という風に信じているわけです。私たちが持っている知識でズカズカと入って行って、「間違っているわよ」って、あなたね、女の子がね、男性と対等なんていくら言っても彼らには通用しない価値観です。けれども、教育を得ることによって自分たちが居心地悪さを感じ、これおかしいよね、どうしようということで知識を得られるようになれば、もっと良い人生を自分たちで歩もうとする努力ができるようになると考えました。ツールとして教育を得て欲しいなと思って、それで学校を作り始めたわけです。10校建てまして、だいたい3,500人の子供たちが今勉強できるようになった環境をお手伝いして整備したのですけども。だから、結局どうやってできるかという、その人たちをどう支えてあげられるかということを、その都度、その都度、皆さん違う状況だと思えます。だけど、同じような教育レベル持っている同士で文化が違うのであるならば、やはり説明をする。



小玉医学部長: 医学部長の小玉と申します。私は、10年近くボストンに居りまして、ずっと子供と手を繋いで小学校に通ってましたことを思い出しておりました。ちょっとお聞きしたいことが2点ございまして、1点は感覚的に軽いお話ですけども、年齢の相違と女性の働く人口のMカーブがありました。米国におりまして住んでいた場所にもよるのかもしれないですけど、比較的税金が高い地域。そういうところで働いておられるお母さん。よく友達で家内と一緒にいろいろ付き合いさせていただいたけど、弁護士をされていたりして、自分のキャリアパスの間で、ここは教育の期間だからとひいて仕事もしておられる。ただ、あの方達の話聞いていて思い出したら、やはり、社会復帰できるような社会的背景があるのではないかと強く感じていまして、日本で同じ事は出来ないですよ。だから、そう

いったところを少し変えるような働きかけというか、そういうのが国に足りないのではなかと強く感じていました。あと、もう1点は学校法人のお話ですけども、朔学長がお話されたように、いわゆる上位職、学長とかそういった教授職もそうですが、なかなか女性の教官、あるいは上位職の方がいません。そういった男女共同参画のワークショップに参加して、どう言う施策がそれに繋がるかという話をするけども、我々は福岡大学というご存知の私学です。いわゆる経営的な背景がすごく求められる。そこが反映していないと、ただジェンダー分けてそういうような役職に着任していただくのが難しいようなお話をしたら、東京大学をはじめ色々な女性の副学長に袋叩きにあったんですけど。そこはパーセントだけ上げられる様に選択できるのと、いわゆる会社だとか社会背景によって、なんというか、言うのが難しいけど、均一にそういう風にはできないような背景というのがあると思うけど、何かそれに関して少しコメント、お考えとかいただけたらと思います。いかがですか。

マリ先生:結局、今すぐにできるということと、目指すことというものは違うと思います。それで、女性たちを育てようとする土台をきちんと作ることが大事だと思います。というのはこの1、2年ですぐに学長になれるような方とか、先程言われましたように、そういう幹部に居られるような女性たちを。でも、結構能力があってできるのにもかかわらず、むしろ女性のほうも「逆に自分はここまでね」ということでの自分の諦め精神が女性たちにもあるようです。ですから、声をかけられて「やりませんか」と言われれば、「まあ、できるかどうかかわからないけど頑張りたいです」という形で入る女性もいれば、本当にバリバリ、自分が偉くなりたいと思ってやれる女性たちもいますし。あと、自分がやらなければ他がやらないということで、責任感とそういう夢に駆られてやる女性たちもいます。男性と全く変わらないと思います。ただ、土台を作っていくということがとても大事なので、それこそさっきおっしゃったように、やっぱり経営というものは、長年携わってないと上手くできないものであるわけですから、そういうところにアシスタントや、自分の側でいろいろなものを学んでもらえるような状況をきちんと作っていくということが大事で、やはり、そういう土台を作る以外、私は難しいのではないかと思います。アメリカとかヨーロッパの場合もものすごく女性にとってガラスの天井もあるわけですし、さっきお話しされていたアメリカの話で、まさにそういう社会を目指す背景があるからアメリカの女性たちが頑張れるし、頑張ったからと言ってできるかという、やっぱりまだまだ足の引っ張りもたくさんありますし、やっとヒラリーさんで初の女性大統領が出てくるかなと思ったところ、かなりそれは彼女の能力、運よりは本当に女性であるからで足引っ張った人たちもたくさんいます。そういうことも含めて社会がそこまで成熟していかないと無理だと思うので、組織的にそうやってトップダウンでできるものは本当に頑張って早くに整備をきちんとして行くということが私はとても重要ではないかと思います。

朔学長:もう時間になりましたので、この辺でクローズさせていただきますけど、異文化コミュニケーターという言葉が本当にぴったり。身体に沁みたとはいく、今までのマリ先生の実績が非常によく伝わったと思っています。

